【全国唯研の先達に聞く】

吉田傑俊氏インタヴュー

日時：2018 年 3 月 12 日（2019 年 2 月修正）
インタヴュアー：鈴木宗徳・和田悠

吉田傑俊氏略歴

1940 年生。京都大学文学部哲学科卒業。同大学院文学研究科修士課程修了。神戸大学文学部助手、鹿児島大学教育学部講師、助教授、教授を経て、1986 年法政大学社会学部教授。2006 年同名誉教授。1996 年唯物論研究協会委員長（1998 年まで）。

● 大学時代・大学院生時代、そして当時の「京都学派」との関わりについてお聞かせください。

僕らの学生時代は安保闘争とその後の大学管理法など波乱の時代でした。いわゆる六〇年安保闘争への参加は、浪人などをしたこともあって、自分たちが世の中を変えることができるんだというような実感を得たのは大きかったですね。たとえば京都の四条通とか河原町通で八列縦隊でデモをしていると、市民の人が拍手してくれるんですね。これは大きな経験だったと思います。だから、僕は教師になって、その後そういう経験をあまり持たない学生さんが多いことは不幸だなあという感じはしています。そして、大学入学前は文学か哲学かどちらに進むかに迷っていたのですが、こうした時代状況によって哲学に進んだと思います。

京大の学部とか院生時代の雰囲気はどうだったか、戦前の「京都学派」の影響があったかどうかということですが、それはほとんどなかったと思います。それは、当時の教授が、西田幾多郎・田辺元などの京都学派の「第二世代」だったからですね。第二世代でも例の高坂正顕ら「世界史の哲学」派の人々は戦後追放されたりして、比較的実証的な方々、古代哲学は田中美知太郎、中世哲学は高田三郎、そして純粋哲学は野田又夫さんでした。僕の指導教授だった野田さんが、時々私はレーラー（教師）に徹する、だからあまり大きな世界観とかは語らないと言っておられたのを聞きました。これはやっぱり「京都学派」の先輩たちが結局戦争にコミットしていったことに対する反省というのがあったんじゃないかと思います。もっとも、近世哲学の辻村公一さんなどは田辺さんの弟子ですし、田中さんも晩年はコンサバティブなエッセイを『文藝春秋』などに書いていましたが、野田さんはデカルト・カントの専門家でリベラルでしたね。また、人文研の上山春平さんなども非常勤で文学部にも来ていました。それから、思えばもったいないと思いますがね、吉川幸次郎とか桑原武夫さんらが教養部へも非常勤で来ていましたが、僕なんか学生運動中心で、そういう得難い人の講義を聞かなかったんですね。吉田千秋君らと自治会運動をやったり、唯物論研究会を作って名古屋大学におられた真下信一さんの講演会を開いたりして、千秋君はその講演を一つの機縁として大学院を名大に移ったのですよ。

京大の唯研というのは、鰺坂真・鈴木茂・有尾善繁さんなど 7～8 才先輩の方が先につくって活動していたようですが、僕たちの時代の唯研とは完全に途切れていました。僕らは再建じゃなくて新しく作るという意味でやったわけです。そこで向井俊彦・両角英郎・牧野広義さんなど数年下の方も参加していました。尾関周二・種村完司・碓井敏正・亀山純生さんなどは別のサークルなどで運動していたと思います。

ただ、60 年代後半から 70 年代の京大の学園紛争には、僕は神戸大の助手になって参加していませんが、先に挙げた方たちは参加していたと思います。そして、彼らは鰺坂・鈴木・有尾さんなど

ISSN 1883-0803

とヘーゲル研究会を続けて、それを基にして現在の関西唯研を立ち上げたのです。

● その後の神戸大や鹿児島大でのご経験はいかがでしたか。

僕は、大学院のマスターで院生協議会の事務局長をやらされたんですよ。それで学部長・学生部長の団体交渉とかに忙しかったですね。さすがに野田さんも僕が活動家というのは判ったんですね、僕はドクター課程に進もうと思っていましたが、神戸大学でいま助手を募集してるんだけど、君はそれに応募したらどうかって言われたのですよ。その時の神戸大学の文学部には、ヘーゲル研究者の武市健人さんの弟子の清水正徳教授がいました。清水さんは東北大学で武市さんや大塚久雄さんの薫陶を受けた方で、関西ではやや「労農派」に近い唯物論者で有名だった人です。野田さんから君はそういうとこに行ったほうがいいんじゃないかって言われて、推薦状も書いてくれてそれで神戸の助手になったんです。

しかし、1968 年から 69 年にかけての神戸大も、京大と同様にずうっと全共闘運動が盛んな大変な時期でした。全学封鎖で授業がほとんど開かれないのです。教授会が三宮のレストランなどでやっていましたからね。一番ショックだったのは、全共闘が校舎を封鎖して図書館や研究室の本を古本屋に売り出したという話でした。僕はこれはもう運動じゃなく退廃だと思いましたね。それでも三年くらい我慢してたら講師ぐらいにさせてくれないかという希望を持っていたんですけど、そう上手くいかない。神戸大でも教職員組合の中央委員や助手会でも活動して、そこで全共闘に毅然とした態度をとらない教授会批判なんかもやったわけです。で、清水さんとも次第にうまくいかなくなる。それで、助手二年弱くらいで、機会を得て鹿児島大学の教育学の講師として就職したのです。

鹿児島大では、地方大学の大変さというのを経験しましたね。つまり研究会をやろうとしても、民主的メンバーは 10 人くらいに固定化してしまうんですね。ただ「方法論研究会」というのを作って経済とか法律とかの人と交流できたのはよかったです。そこで僕は内外の哲学の古典の基礎的な勉強ができたと思いますし、『資本論』なども経済学の人などから教えてもらいながら勉強しました。鹿児島はかなり保守的な人が多いところでしたが、結局酒を媒介にして仲良くなりました。酒（焼酎）好きですから、鹿児島の人は。それで、教育学部では、僕は哲学を担当し、倫理学はしばらくして種村さんに来てもらい、社会科教育には中西新太郎さんも呼ぶことができました。

苦労したのは、鹿児島大に赴任して、そこで論文集を出すという話になるとね、結局その地域の研究になってしまうわけですね。たとえば『薩摩半島の総合的研究』とか、その後の『鹿児島の歴史と社会』とかね。じゃあ僕ら思想やってる者は鹿児島に関わって何を書くんだという問題にぶつかるわけです。それで結果としてはよかったのですが、「森有礼と日本の啓蒙思想」とか「西郷隆盛――その思想的一考察」とかを、なんとか勉強したわけです。この二人は鹿児島出身で、やっぱり日本の近代化に積極的に関わるが、一種の挫折をしているわけです。森も暗殺されるし、西郷も城山で自害するわけですよ。彼らも彼らなりに近代日本を創ろうと努めたけれども、やはり大久保利通などのデスポティックな近代主義者に負けていくわけです。そういうことを考える中で、鹿児島という地域は、自分にとって日本の近代化とはなにかを考える非常に刺激的な場所となったという気がしました。それらの論文は、僕の処女作『唯物論と日本イデオロギー』の中に入れたのです。

● 1971 年の全国若手哲学研究者ゼミナールの結成、1978 年の全国唯研の創立への参加の経緯と趣旨について、お聞かせ下さい。

1971 年に「若手ゼミ」ができました。このきっかけは、数年前に亡くなった石井伸男さんと吉田千秋さんが、『科学と思想』という雑誌に日本哲学会の総会を傍聴して何か感想を書いてほしいと求められたのですよ。で、二人で行って、日哲の高踏的な「アカデミック」に構えている状況に二人

ISSN 1883-0803

は怒って、批判的エッセイを書いたわけです。

それを契機として、なにか全国的な若手の哲学専攻者が集るゼミナールをやらないかということになったのですね。で、その当時、石井さんは都立大の助手で、千秋くんも名古屋のオーバードクターか岐阜大に就職したくらいかな。それから、北海道の村山紀昭さんで、彼はその後多く大学行政に関っているようですけどね。それから京都の向井俊彦くんは立命に就職した時期か、オーバードクターだったかもしれません。僕は鹿児島に一番早く就職したわけです。その五人が発起人になって、全国レベルで哲学・思想専攻の院生にゼミナールを作りませんかと呼びかけたのです。

個人的にも、神戸大学文学部の紀要に書いた僕の助手論文「労働と疎外」、僕の活字になった最初の論文なんですが、これは少し反響があって、北海道の吉崎祥司さんが評価した論文を送ってくれたんですよ。これも、僕が若手ゼミや唯研にもつながっていく一つの契機だったかなあと思っています。若手ゼミ設立の趣旨としては、唯物論か観念論かということに基準をおかず、ハイデガーでも、サルトルでも、カントでもいいし、プラトン研究でもいいけど、今の日本の哲学の形でいいんだろうかっていう、非常に広い形で呼びかけたのですね。その五人が中心になって地方に呼びかけて、第一回を湯河原でやったんですけど、50〜60人集まったと思います。

このゼミの組織形態も実にユニークでね、世話人は必ず一年で辞めることにしたのです。今でもそうですかね。役員はせいぜい二年くらいやってもいいじゃないかという意見もありましたが、それは請負主義になるというので、毎年のゼミの終わりに次の人を選んで一年やってもらう。五人でそう決めたのです。今はどうなってるのか分かりませんけど、ゼミ誌の『哲学の探求』という雑誌もまだ存続しているのでしょうか。鈴木さん・和田さんのお二人も参加されたんじゃないですか。

ただ、若手ゼミも次第にアカデミックになっているかもしれませんね。でも、この若手の全国組織の設立が刺激になったと思うのですが、全国誌の『唯物論』という雑誌ができたわけですよ。この雑誌の最後のページに編集委員のお名前が出てますけど、12〜13名の編集委員会が雑誌を出す形態をとった。これ、ただ11号で終わってしまうのです。内容をみるとすこし固いんですよ、唯物論とか弁証法とか、国家論とかね。そういう唯物論のいくつかの領域で何を構築するのかというやや理論的な探究が基調だったと思います。だけど、若手ゼミの設立も一種の刺激になり、この編集委員会が中心になって、1978年に全国組織としての唯物論研究協会（唯研）をつくるということになったのです。そして、『唯物論』はそこで終刊となり、唯研の年二刊の機関誌『唯物論研究』が79年に発刊したのです。

その意味では、唯研は、各地の唯物論研究会のメンバーと若手ゼミのメンバーが重なって作ったという形になります。東京唯研とか北海道の札幌唯研とか、名古屋は唯研ではなく名古屋哲研でしたけどね。それから京都、大阪ですね。これらの地域のメンバーが集まり、その第一回大会は法政大学で開催しました。それで全国組織の創立大会を開いて、委員は全国から選ばれるように各地域の代表を推薦する形で、委員20名のうち10名は推薦でした。そういう中で、僕も九州代表として選ばれたわけですが、第一回大会から30年くらい委員をつとめましたね。この唯研設立時の事情は中村行秀さんが詳しいと思います。

ところで、この『唯物論研究』も、かつての『唯物論』にやや近い理論的研究に重点を置くものでした。それで若手ゼミから出てきた佐藤和夫さんなどが中心になって、もう少し現代の思想問題を探求する雑誌を作ろうということになりました。それで、85年に季刊誌『思想と現代』という雑誌が発刊したのです。もっとも純理論的問題も続ける必要があるということで新たに『唯物論研究年報』も刊行され、85年からは季刊と年報雑誌の二本立てになったわけです。

僕は86年に法政大学に移ったのですが、『思想と現代』の初代の編集長は佐藤さんで、僕はすぐ二代目の編集長で二年やらされて8号作りました。

ISSN 1883-0803

大変でしたよ。季刊っていうのは本当にしんどかったですよ。三か月に 1 号でしょ。論文などストックしとかないと、次号が出せないんです。だけど、特集に「性」(8 号)、「＜コミュニケーション＞を哲学する」(21 号)、「環境の未来」(24 号)、「コンピュータ」(33 号) などアクチュアルな問題に多様な執筆者で接近し得たことは確かと思います。

面白い話がいろいろあるんですけど、一つだけしますとね。「フランス革命 200 年」(16 号) という特集をやったんですよ。このとき、亡くなった古茂田宏さんが担当しました。で、西洋史の江口朴郎と湯川和夫両先生に対談してもらおうと、編集長の僕も立ち会って江口先生宅に伺ったのですよ。そしたらね、江口さんはだいぶ体調を崩されていたんですね。半分布団の中に座ってボソーっと喋られるんですね。湯川先生も 70 歳で大学辞められていてね、75、6 才かな。もうお二人の「禅問答」みたいになるわけです。それで古茂田さんがものすごく苦労して補充してうまく繋がったのですよ。これは古茂田さんがまとめた労作だと思う。禅問答を立派な対談にうまく仕上げたんですよ。

それで、『思想と現代』は読者もかなり多かったと思いますが、唯研の力量や出版社の事情もあり『年報』との二本立ては困難になり、96 年から『唯物論研究年誌』に一本化したのです。年四回出版が年一回出版になったのは残念でしたし、今もそう思っています。

● この頃、論壇が衰退してきたということだと思います。『思想と現代』も売れていたし、他にも社会問題とアカデミックな問題を両方議論できる総合雑誌のような空間があったのに、しだいに失われていく時代だったのでしょう。

たしかに、『思想と現代』じゃなくて『現代と思想』という青木書店から出ている雑誌がね、70 年代始めに出てちょうど十年の 70 年代で終わるんですよ。この雑誌は、僕らも熱心に読んだものです。数年前出た東京唯研の『戦後マルクス主義の思想』に、僕も戦後マルクス主義の「市民社会論」と「自由と民主主義論」について書いたのですが、70 年代はこの二つがメイン・テーマだったので、面白かったんです。他方で、高度経済成長が 60 年代を境にだんだん破綻して公害問題が出てくるでしょ。かなり面白い時期だったと思うんです。つまり、一方で平田清明氏の市民社会論へのマルクス主義からの批判や対案が出たり、秋間実先生が、今までのマルクス主義の自由論は主として必然との関係を強調してきたが政治的・市民的な自由の問題を考えるべきだという問題提起をされたりしたわけです。だから唯物論・マルクス主義とかが活性化した時期だったと思います。ところが 80 年代になると、社会党が右傾化したり、公明党が自民党にくっついていくとか、リアクションがずーっと出てきました。こういう状況の中で、唯研は良く頑張ったのですが、しだいに萎んでいったかもしれません。それが機関誌の形態にも現れたともいえるでしょう。

だけど、70 年代には革新都政とか府政が出現しました。東京の美濃部さんとか、京都の蜷川さんとか、大阪の黒田さんとかです。蜷川さんなんか七期知事やったんですよ。七期目の選挙の時、自民党などのその殺し文句は何だったと思います。「蜷川さんがもう一期選ばれたら、平家より長うおますなあっ」、と。平清盛は 24 年、だから選挙戦術として京都人のある種の意識を上手く利用したわけです。とにかく 70 年代に高度経済成長のひずみのなかで労働運動の問い直しや反公害運動が盛り上がっていたのが、80 年代の世界的な新自由主義の席巻のなかで巻き返されていった、大変な時期だったのです。

● 近代主義とマルクス主義が緊張感をもって対峙していた時代の論争の成果を、今どのように生かすべきでしょうか。

僕は若手ゼミとか唯研とかの運動に参加しつつ、地方の鹿児島で十数年を過ごしたのですが、内外の古典を読んだという点では非常に意義があったと思ってます。80 年に『唯物論と日本イデオロギー』を書きましたが、これは唯物論とは一体

ISSN 1883-0803

何なのかというのを考えたものです。僕も、最初はヘーゲルとマルクスを唯物論的に対比するという、人並みのところから出発しました。だけど、地方大学で過ごして、地方と中央のことを強く意識させられました。先ほど言ったように、西郷隆盛にしても森有礼にしても一旦は中央で活躍したのに彼らの理想は挫かれてね。鹿児島は僻地になっていくわけですね。そうした日本の近代とはいったい何なのかということを、非常に自覚させられたわけです。それで、唯物論というのは、テキストを唯物論的に読み直すということだけではだめで、自分のいる場所とか自分の地域で考える必要があると痛感したのです。

それから、この間亡くなった水俣の石牟礼道子さんの思想の批判的検討も行いました。それは鹿児島の科学者会議で何回か水俣へ調査に行ったことや、彼女の『苦海浄土』などを読んで、ちょっと疑問に思った点があったわけです。石牟礼さんが「近代」とか「文明」とかを正面から敵視することはやむを得ないとは思うのですけど、それだけじゃ済まないんじゃないかという点ですね。地方は神聖であってチッソや中央権力は悪魔とする点なんですけど、そういうことも含めて、近代とは一体何なのかいうことに関心を持ったわけです。それを『唯物論と日本イデオロギー』というような形でまとめたのです。もうちょっと現実と言いますか、日本の現実、日本の近代の現実ね、そういうところをどう見ていくのかというような関心ですね。

それに加えて、僕は75年から一年ほどハイデルベルク大学へ留学したとき、当地の教授に「貴方は日本から来たんだから、日本の思想について簡単に報告してほしい」と言われたんですよ。だけど、僕は「カイネ・アーヌング」だったんですよ。日本の思想について、もちろん福澤とか近代思想は読んでましたけど、日本の思想を通史として簡単に報告することはとうていできない、僕はものすごく恥ずかしかったですね。それが、自分の現場としての日本とか日本の思想とかをやり直す必要があるんじゃないか、それが唯物論的観点でもあるんじゃないかって。

それを基にして辿り着いたのが、日本の現代思想論としての『戦後思想論』(1984) です。これは今まで僕が書いてきた中で一番読まれた本で、三刷りで6,000部くらい売れたんですよ。これは、デモクラシー論としての丸山眞男・竹内好、ナショナリズム論としての小林秀雄・江藤淳、インターナショナリズム論としての森有正と加藤周一を対比しつつ、戦後思想の展開を検討したものです。さらに、これが一つの契機になったと思うのですが、法政大学の湯川先生から、私は近く定年になるのだけど、あなたはその後任人事を受けるつもりはないかというお話があったのです。それで86年に法政大学へ移ることになったわけです。そして、その法政に移るとすぐ唯研の季刊誌の編集長や、さらに委員長なども含めて色々やらされましたが、大変だったけど面白かったし自分を鍛えてもらったと思います。

● マルクスの思想における市民社会概念の探究にとり組んでこられましたが、マルクス主義者の市民社会論の把握をどう思いましたか。

僕の市民社会論へのいくらかの研究は、1989年の社会主義の崩壊が大きなショックになって、『現代民主主義の思想』という本を書いたのが始まりです。これは民主主義というのは一体何なのかということを改めて検討したのです。つまり芝田進午さんなんかがよく指摘されていましたが、社会主義というのは、資本主義を倒して土台に経済民主主義をつくるだけでは駄目なんで、上部構造の政治的民主主義を伴わない社会主義は本来の社会主義ではない、ということですね。これは非常に重要だと思いました。ソ連は、経済的な土台は機械的な計画主義ですけど一応作ったのだけども、一党独裁などの非民主主義的な体制をとり続けました。では、一体民主主義というのはどういうことなのかを、法政の講義をしながら書いたんですけど。ロック、ルソーを経て、ヘーゲル、マルクスですね。それからグラムシまで一応勉強して書いたんです。これが市民社会論へ向う一つの契機に

ISSN 1883-0803

なりました。

つまり、今までのマルクス主義は一種の階級闘争主義が主軸であったのではないかということの反省ともいえます。そして、検討していくと、マルクス・エンゲルスの歴史観には二種類あるといえる。『共産党宣言』には「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」という規定があるが、『ドイツ・イデオロギー』には「これまでのすべての歴史的諸段階にとうぜん存在した生産諸力によって規定され、逆にそれを規定しかえす交通形態とは、市民社会のことである」と規定がある。だから、市民社会というのは、人間による「生産」とそれをもとにした「交通形態」が機軸だという考え方が、『ドイツ・イデオロギー』にはあるわけですよ。そして、この市民社会（ビュルガーリッヘ・ゲゼルシャフト）は、一つは歴史貫通的な下部構造的なものを意味し、つぎには歴史特定的なブルジョア社会、さらに将来的な市民社会つまりパリ・コミューンを考察した『フランスの内乱』の中に出てくる「国家を再吸収する社会」という、重層構造をなしている。このことを指摘したのが、2005 年に出版した『市民社会論――その理論と歴史』でした。

その前の 2001 年に、僕はエーレンベルクの『市民社会論』を翻訳したのです。これはイギリス、ドイツ、フランスなど西欧の市民社会の諸形態から現代アメリカ社会まで非常に詳しく分析した興味深い本でした。ただし、いわゆる「ブルジョア社会」と、肯定的な意味での「生産と交通」が織りなす市民社会の区別があまり明確でないという不満があったのです。たとえば「ただし、市民社会が経済過程や市場によって構成されるものであれば、市民社会は社会主義によって生き残れなくなる」というような表現に、ちょっと引っかかったんです。経済過程や市場というのは社会主義でもあり得るんじゃないかという問題ですね。これはまだ未解決で大変な問題ですが、一切の市場をなくした社会主義はありえないんじゃないかと。そういう意味で、この『市民社会論』は自分でもう一度考えて、さきの翻訳書を補足する意味で書いたのです。

それからもう一つのポイントは、法政大学から国外留学の機会をもらって、1993 年の秋から 95 年春にイギリスのケント大学のデヴィド・マクレラン教授の所に行きました。彼のゼミに出て、非常に面白かったのです。そして、このゼミのある年度の論文集である『社会主義と民主主義』という、彼の編著を翻訳させてもらったんです。これは、「憲章 88」運動という当時のイギリスの具体的な市民権拡大運動に参加している論者らも含めた、色々工夫しながら社会主義と民主主義をリンクさせようとしている論集です。これは非常に興味深かったですし、僕の民主主義論にも寄与してくれました。その後は、市民社会論の前提として『マルクス思想の現代的可能性――民主主義・市民社会・社会主義』を 1997 年に、『国家と市民社会の哲学』を 2000 年に唯研の「現代批判の哲学」シリーズの一冊として書きました。

だから、要するに僕の市民社会論というのは、民主主義的な社会主義像をどう作っていくか、社会主義の崩壊と言われているが、さきほど言った経済的な側面だけでは駄目で、上部構造的なものと結節しなければならないとだめだ、ということを機軸にしています。再度言うと、マルクスやエンゲルスの思想の中にすでに二つの路線、階級闘争的な側面と市民社会的な側面があって、後者は生産とそれにもとづいた交通（フェアケール）があって、フェアケールというは「物の交換」というだけではなくて、もっと「人間と人間との相互の交流」という民主的な広い概念だと捉えたわけです。

しかし、今までの日本のマルクス主義にも先の二つの系列があったといえる。たとえば、見田石介さんが平田清明さんの市民社会論を批判したときに、ちょっとラフに言えば、「ビュルガーリッヘ・ゲゼルシャフト」は「ブルジョア社会」としか言えないじゃないかという批判をされました。たしかにドイツ語では同じ言葉なんですけど、フランス語では、マルクスは「ソシエテ・ブルジョア」（ブルジョア社会）と「ソシエテ・シビル」（市民

ISSN 1883-0803

社会）に区別している。この区別が理解されていないことを僕は意識して、市民社会論を軸に民主主義・社会主義を関連づけようと試みたのです。ただし、僕の市民社会論には異論も存在することは知っており、一つの問題提起として受け止めてもらい、議論してほしいと思っています。

● 市民社会論の探究は、それ以前の『戦後思想論』をまとめた辺りの仕事とどう繋がるのか、また日本の市民社会論者のどこを評価し、どこから刺激を受けて、その後の市民社会論の仕事に繋がっていったのかを、もう少しお聞かせ下さい。

『戦後思想論』で、ぼくは、丸山眞男・加藤周一・森有正さんなどを扱って、やっぱり戦後日本のデモクラシー論に関心を持ったわけです、特に丸山さんなんかの。彼はマルクス主義に厳しいところがあります。マルクス主義は、ルソー主義的に特殊意志を一般意思のようなものに吸収してしまい、多数者の少数者に対する独裁みたいな問題が出てこないかというような指摘ですね。それはかなり難問なんです。それは、さきほどから言っている民主主義というのは必ずしも経済的な組織・体制だけではなくて、上部構造的な政治制度や社会関係の問題として、そういう中でどういう風に貫徹されていくべきかという問題を提起していると思うんです。そのさい日本に依然として存在している天皇制体制、こういう制度に対してどう向かっていくか、それが丸山の戦前の「超国家主義」に対する批判だったわけですね。ただあれは戦前・戦争中の日本の天皇制の問題であって、戦後については藤田省三とか松下圭一のような人たちにバトンタッチされていきました。ただし、そうした丸山学派は、下部構造的なところから上部構造的なところへ関心が多く移っていくわけです。だから僕は、さきほどから言ってるように、社会主義というものを思考するとするならば、経済的な体制と、特に民主主義の制度としての上部構造的なものとの結節を重要視しなければならないと自覚したのです。

ちなみに、僕は三人の先生方の悼辞を書いています。それは、古在由重先生、湯川和夫先生、それから古田光先生で、いずれも法政大に移ってから親しくして頂いたこの三人の先生に、僕は非常に多く教えられたと思います。

僕は法政に来てすぐに「古在ゼミ」に参加したんですよ。そこで人間としての古在先生に接触できたのですが、非常に鋭い民主主義的センスの持ち主と思いました。たとえば、ある論文の中で次のようなことを指摘されています。マルクス主義・唯物論は日本へ革命理論として導入された。これがいけない、ということは絶対にいえない。しかし、マルクス主義の前提となっている思想が十分に咀嚼され紹介され血肉化される前に、革命理論としてのマルクス主義・唯物論が一挙に導入された。このことが自由と民主主義とかが日本の中になかなか定着しなかった一つの要素ではなかったかと、指摘されています。過去の問題ではなく、今後の問題として重要な観点と思います。

また、湯川先生も一貫した民主主義者だったと思います。僕は先生が辞められたあと後任として法政大学の社会学部に入って、ある外国人教師の方と知り合いになりました。で、あなたは湯川先生の後任かという話になって、彼から湯川先生は本当の「デモクラート」だった、教授会の発言などはその典型だったというような話でした。まさに湯川先生の書かれた『社会思想史』などで強調されているのは、方法としての民主主義ですね。制度と方法の結節、つまり民主主義というのは人民主権を実現することである、それゆえに、人民主権をどのように実現するかが、また民主主義の方法でなければならないという点を執拗に説いておられるんですね。さらに、古田先生は古在ゼミで同席してから親しくして頂いて、古在先生が亡くなられたあと、友人たちと「古田ゼミ」をお願いして十年以上継続しました。そして、先生が亡くなられた以後も、この名前のゼミを現在も継続しています。古田先生には、日本思想史のイデオロギー過剰にならない厳密・正確な方法意識を学んだと思います。

僕が法政に来てからのとくに民主主義探求の方

ISSN 1883-0803

向は、この三人の先生の問題意識が非常に大きく影響したんじゃないかと思います。それで民主主義について講義しはじめて、それが『現代民主主義の思想』になったわけです。その三人の先生の影響というのは、僕は自分の中では非常に深いと思ってます。

● そうした方向で何かに取り組まれてきたとき、「自由か必然か」ではなくその間を含めた構想みたいなものが必要だというのが、ずっと動機としてあったのでしょうか。

そうですね、ソ連社会主義崩壊後のイギリス留学中に、「「社会」主義を再考する」（共著『「近代」を問いなおす』1994）という論文を書いたことがあります。ポッパーとアーレントを軸にして書いたものです。両者は、プラトンが理想化した古代の都市国家とマルクスが批判した近代社会を対象としつつ、マルクスを批判します。簡単にいえば、ポッパーはプラトン的国家とマルクス的社会主義を、人間的「自然」を国家的に「規範」化する全体主義とみなしました。またアーレントは、近代の大衆社会批判をマルクスの労働解放説に関連づけ、人間の「経済的充足」にたいする「政治的自由」の優越性を強調しました。両者ともに、これはちょっと極端に図式化していると思いますが、問題はやはり必然と自由に関わります。だから、結局、マルクスの生産と交通（または交流）という視座を堅持しつつ深めることが、真の「社会」主義の理解、とくに政治的な民主主義の問題や自由の問題により強く深く関わってくると考えたのです。

また、この問題は、マルクス主義と近代主義の対峙の問題にも関わります。戦後直後の 1948 年に主体性論争がありました。マルクス主義の観点から、蔵原惟人さんとか見田石介さんたちが、厳しい近代主義批判をしました。だけどあの論争で丸山さんや日高六郎さんなどが強調したのは、当時が前近代から近代をどう形成していくかの特殊な時代か否かということでした。それに対してマルクス主義は、近代というのも来るべきもう一つの疎外的拘束なんだということを強調したと思います。ちょっと近代主義が「内在的」すぎたと言うならば、マルクス主義のほうは「外在的」であったといえるかもしれない。だからちょっと先を見すぎて近代主義批判を行ったといえます。ところがまた近代主義者では、当面はとにかく日本が前近代から抜け出す必要があるんだということがあまりに強調されて、どこへ向かうのかという目標が次第に薄れていったという面もあったと思います。残念なことに、両者のそういう理論的なくすぶりが、六〇年安保のときに実践的にも分裂に至るわけです。つまり、リベラルと革新派が二つに分かれたことが、戦後の日本を非常に不幸にしてしまったと思うんですね。

反安保条約運動での分裂というのは、当初は近代主義（市民派）と革新派（マルクス主義）は全国的な「反安保共闘会議」で結束していたが、当時の岸内閣が警官を国会に導入して反対活動する野党議員などを議場外に排除したのに対して、前者が議会主義の擁護を中心にする方向に収斂していったのに対して、革新派は労働者のストライキを中心に安保条約廃棄の運動まで進めようとしたことによるといえるでしょう。この具体的な運動での分岐から、両者の理論的な対立も明確になり知識人間の分裂も進行していき、この影響は今日の「九条の会」発足あたりまで続いたと思います。

● 唯研における知識人のあり方については、どのようにお考えでしたか。

唯研の初代とその次の委員長は湯川和夫・岩崎充胤先生で、僕らの世代より少し離れていて、僕らが近しい関係を持ったのは僕らより一世代上の、たとえば芝田進午、嶋田豊、秋間実さんとかでした。この先生方は非常によく勉強されているし、戦後の唯物論・マルクス主義発展のために大きな貢献をされた人々だと思います。ただね、僕らの世代は若手ゼミだとか、唯研を作ろうというときにも、一つの層として団結しながら推し進めたところがあるんですね。その点で、先の先生方はちょっと個別的な活動が多かったんじゃないかと感じるところがありました。その点では、僕ら一世

ISSN 1883-0803

代下の団塊世代位までの人はみんなで一緒にやっていこうという点はあったんじゃないかなと思います。集団主義というか、民主主義をなるべくみんな連帯しながら進めていこうというような方向ですね。

たとえば、『思想と現代』に返ると、じっさいにはどこまでいったか分かりませんけどね、現実の問題を踏まえて、それを理論化し対応していこうとしました。唯物論とは何か、弁証法とは何かというのを一般的に論ずるのじゃなしに、特に『思想と現代』では様々な問題をやったわけですよ。「天皇制」の問題もやったし、「性」の問題もやったし、「アジアの中の日本」とかそういう問題もやりましたね。だから、僕はやはり季刊誌の方がいいと思うのですけどね。『年誌』ももちろん「終末の時代」とかね、「欲望の問題」とか「格差の問題」とか色々やって苦心されているのを読んでますけども、年に一回という限定面もありますよね。だから雑誌ではなく、これは単行本になっちゃうわけでしょ。本格的な論文が多いのですが、ジャーナルな問題に繋がらないところですね。言いたいこと分かってもらえますかね。

● 1990 年前後のソ連崩壊と東欧革命をどのように受け止めましたか。社会主義や唯物論の理念について、体制崩壊を導いた市民運動について、当時どのようなことを考えましたか。

すでに語ったように、この問題によって、結局、社会主義とは経済体制に還元する問題ではなく、政治的社会的な体制としての民主主義がなければ社会主義とは言えないという論点をとくに強く持ったということですね。

ソ連崩壊と同時に東欧の変革の動きを一般に肯定的に論じ出した時期があって、僕も最初ゴルバチョフの改革ということで大いに期待したんですよ。古在先生の思い出に書いたんですけど、古在先生は目を痛めておられてメガネの上にさらにぶ厚い虫メガネでソ連とか東欧の内外の情報を読まれたりして、社会主義の刷新だっと評価されていたんですよ。僕も最初はそういう期待を持ってたんですけど、結局は残念ながら「遅すぎたブルジョア革命」に帰着してしまった。だから今のソ連なんか見てもマフィアみたいなのがいっぱい出てきているし、プーチンが独裁的な立場をとっているし、もう社会主義とはほとんど言えない強大国ですね。中国もそういうところがあるようですけどね。だからちょっと期待しすぎたなあという感じです。

● 「近代の超克」的な思想傾向への危機意識がつねに研究の底流にあったと思いますが、現在も同じ危惧をお持ちであれば、どのような時にそれを感じられますか。

「近代の超克」というのは、戦争末期に京都学派とか日本浪曼派とかによって開かれた座談会のテーマですね。主張としては、今まで世界史はヨーロッパのアングロサクソンに主導されてきた。だが、いま欧米の帝国主義的近代は行き詰っている。これからは旧植民地であったアジアが勃興する時期で、インドや中国を含めてアジアの覚醒が必要で、そのリーダーが日本だという「聖戦論」を説いたわけです。実は、それは日本の帝国主義の自立宣言だったわけです。だけど、「近代の超克」というのは西欧近代のメリットもデメリットも一挙に超え出るということで、「近代の止揚（アオフヘーベン）」が必要なんです。「超克」という名の下に、さっき言ったアジアの先駆けの口実になってしまった。だから僕は「近代の超克」じゃなく「近代の止揚」を目指すべきと指摘してきました。

戦後日本にはまた何回も、戦後を総決算しなきゃならないとか、絶えず逆戻り的な掛け声が、周期的に出てきますよね。民主化が行き過ぎてしまったとか言って。僕は「近代の超克」論の本当の中身には日本の「アジア盟主論」があると思うんです。だから今でも慰安婦問題なんか絶対に認めないですね。今の韓国大統領が、もう一度旧慰安婦の声を聞かねばといっても、絶対受けつけない。ああいう中に福澤諭吉以来のアジアの盟主論があると思うんです。アジアの盟主論というのは、戦前と戦後を繋いでいるわけですよ、一貫して我々

ISSN 1883-0803

はアジアの盟主であったし、なければならないという。そうなると韓国とか北朝鮮の制裁論になる。さらに中国なんかに対しても、尖閣諸島とかあれが本当に固有の領土であったかどうかは色々議論があるわけですが、一歩としても譲らないですね。だから戦後清算論の一つの中心的な柱にアジアの盟主論がずっとあって、それが絶えず勃興するのですね。

僕が今すこし取り組んでいるのが、天皇制の問題です。天皇の退位宣言がありましたが、政権やそれが組織した「有識者会議」では、天皇というのはアマテラス由来の子孫であって、人為的な退位とか即位はありえない、というような意見が出ている。それに対して、天皇も高齢になったから退位も認めるという同情論も出るわけです。やっぱり日本人における天皇制というのはいまだに非常に大きい問題と思います。民主的な人々の中でも、天皇制に積極的な関心を持たない人も結構います。僕は、それは日本的な共同体主義とか一種の傍観主義ではないかと思えます。つまり今の日本の祭日というのはほとんど天皇家の行事の日だったわけです。今度また、4 月 29 日の天皇誕生日が昭和の日になったでしょ。それから今年は「明治 150 年祭」なんかが計画されていますが、僕はそれらもアジアの盟主論や天皇制と関係する点があると思うのです。これは、皆さんが忘れてはならない問題として、考えてもらったほうがいいんじゃないかなと思うんですけどね。

天皇制を対象化して議論することは現在も非常に難しくなっています。今ちょっと調べたりしてるのですが、マッカーサーがなぜ天皇制を残したかというと、これを廃止すると暴動が起こってあと 100 万の軍隊が必要という判断をしたとか、あと僕驚いたのは、『拝啓　マッカーサー元帥様』という本があって、当時かなり多くの人々から天皇制存続を願う手紙がマッカーサーのところに来たとのことです。これは判らないですね。敗戦のとき、宮城でひれ伏す人もいたわけですよ。つまり、戦争に負けた国で君主制が残っているのは日本だけなんです。ドイツは第一次世界大戦のとき、イタリアは国民投票で第二次世界大戦後、廃止しました。これがまた「近代の超克」論とかアジアの盟主論と僕は関係してると思うんですけど。

● 知識人と民衆との関係について考えるとき、グラムシを取り上げられることがあります。たとえばグラムシの陣地戦論への評価については、具体的な日本の状況や日本の社会運動を想定しながら考えてきましたか。

知識人という問題から言えば、グラムシは全ての人が何らかの形での知識人だと言っています。たとえば、すべての人がボタン付けとか卵焼きができるから、と。その卵焼きからレストランのシェフにまでなったら、あるいはボタン付けからテイラーまでになった人が専門的知識人だといいます。だけど、その「知識」はその量によって知識人かそうでないかという問題じゃないとします。その知識をどのように使っているか、一部の特権的な人間のためなのか多くの民衆の福祉のために使うのか、その質が問題だとします。だから、グラムシの有機的知識人というのは、まさに何のために自らの持っている専門性を活かすことができるか、ということでした。ですから、戦後初期の近代主義やマルクス主義の知識人は、まさに日本の前近代を克服するために闘って、新憲法の定着のために努力したと思いますが、あの時代の民主的な知識人というのは、まさにグラムシのいう時代を創った、民衆の中に自分らの考えを浸透することに努めた有機的知識人だったと思うのです。

そのこととちょっと関連すると思いますが、僕は、『市民社会論』で強調したように、人間というのは、「階級性」と「市民性」の統一と思っているんですね。だから、階級に属する人と市民に属する人がいるとは絶対にいえないと。僕ら自身が、たとえば大学の教師でも労働者的な側面があるし、それからデモへ行くとか地域で何か活動するとか、それが市民性であって。だけど、階級か市民かといって議論した時期がまさにあったんですよ、70 年代にね。市民主義批判というのもよくやられたことがありました。それもよく考えてみると、お

ISSN 1883-0803

かしいんじゃないかと僕は思うようになったんです。階級性と市民性を我々は両方持っているし、ある時は市民として運動し、ある時は階級としても運動すると。

そのさい、戦後の唯物論者・マルクス主義者が全体としてどこまで民衆のための知識を展開しえたかどうか考えるとき、一つはその内容であり、他の一つは形式であると思うんです。革命の理論としてのマルクス主義の現代批判は、やや未来からの批判という内容を伴いながらも、よく展開したと思います。ただし、それは先にもいった内在的批判ではなくやや外在的な批判になった面もある。つまり、理論的には正しくても単純に現実的であるとは言えないと思います。僕は原理的と現実的を分けるんです。原理的というのは理屈に合っている、論理的である。だがそれを生み出す環境とか民衆の力量とか感性に対応した形で展開してきたかどうかが、問題になる。だからそれも含めて現実的というなら、原理的であっても必ずしも現実的であったと言えない場合があるといえます。もう一つ、グラムシの陣地戦というのはありとあらゆるところで、たとえば工場や学校とか地域やマスコミであるとか、彼は教会とかも含めてますけど、さまざまな具体的な場所で運動を展開しなきゃならないとする。つまり、それらの場面でね。抽象的な理論形態だけではなくて、具体的な運動をしなきゃだめとする。日本でもだんだんとそういう運動が深められ拡大しつつあると思いますが、まだ今後の課題でしょうね。

● 国家からも市場からも独立した「市民」や「市民社会」による成熟した民主主義が確立するには、まだまだ課題が多いと思います。とくに新自由主義の時代において、市場化された教育や消費文化、企業社会のなかで人格形成がなされる傾向について、どうお考えですか。

僕は今の日本はひどい状況にあって、なんというか火をつけたらば～っと燃えるような、貧困と不満と怒りが蔓延している状況にある気がします。たとえば非正規で働いてる人の収入が年間 200 万円位だというでしょう。そういう人たちが三分の一くらいいるんでしょ。青年の男女が結婚できない、だから人口も減少していくわけです。アダム・スミスが『国富論』の中で言ってますが、人口が減っていく国家は滅びつつあると。これは、1%の富豪たちが 99%の民衆を支配している世界的な新自由主義の結果かもしれないですけど、それを解決する主体的力量がなかなか成立しにくい状況が、大きな問題ですね。ともあれ、多くの場所での協同的な関係性の回復が決定的に重要でしょうが、唯研などの若い皆さんに期待するしかありません。

ただね、アメリカなんかでね、むしろマルクス主義がもう一度盛り上がってきつつあるでしょ。サンダースみたいな民主的社会主義者という人が出てきたりね。それからイギリスの労働党のコービンのような、明確な社会主義者が党首になるというのは、何かの前兆みたいな感じもしますね。ギリシャやスペインでも、EU からの緊縮締め付けに反対の反政府的運動が出てきてますし、イギリスでも保守党の EU 脱退に対して反対の意見も強いわけでしょ。だから少しづつは、たしかに草の根的・ボトムアップ的な新しい運動が形成され現れつつあるといえますね。

● 最近の研究成果、今後の研究課題はどのようなものですか。

リタイアしてもう十数年たちましたが、その後目標にしたのは、近代日本思想論のまとめとスピノザの研究でした。前者は、『福沢諭吉と中江兆民』、『「京都学派」の哲学』、『丸山眞男と戦後思想』の三部作として不充分ながらなんとか纏めることができました。後者の課題は、僕なりに哲学とくに唯物論とはなにかをもう一度考えたいということです。ヘーゲルによればスピノザは哲学の悟性的段階ですが、一般に日本人は「悟性」つまり物事をきっちり「分ける」ことが弱いといわれますね。よく言えば「弁証的」に、悪く言えば風呂敷的に包み込んじゃう、清濁併せ呑むとかいう言い方もありますけどね。だけど、唯物論というか理性的ということは、まず分けることですね。分けた上

ISSN 1883-0803

で綜合するとか統一する。そういう点を、スピノザから始めてヘーゲル、マルクスに繋げるか、できればもう一度やりたいという気がしていたんです。だけど、三部作終わったとこでちょっと重い病気になって、その間に天皇の退位問題が出て、それをフォローして『象徴天皇制考』を書くことになりました。書いてみると、またその課題を続ける必要も感じたりして、もうスピノザは無理という感じもしています。

個人的に好きというか、関心が大きい思想家は三部作で扱った兆民、戸坂、丸山です。兆民は、やっぱり原理的だけじゃなくて現実的だと思うんです。彼はルソーを勉強して自家薬籠中のものにしています。『三酔人経綸問答』で三人に議論させるでしょ、洋学紳士と豪傑と南海先生ね。で、理想主義を洋学紳士にしゃべらせ、つぎに侵略主義を豪傑にやらせる。そのうえで、自分に一番近い南海先生は豪傑だけでなく紳士も批判するわけです。洋学紳士には貴方の言うことは全く正しい、正しいけども理論が生きるためには時と場所が必要なんだ、と。一方で、彼は天皇制を含む明治憲法を一応認めます。だが、弟子の幸徳秋水なんかとは、「苦笑して」終わります。やっぱり『三酔人経綸問答』は原理主義じゃなくて現実主義で、そこから自分のまさに鬼子である幸徳秋水が生まれるわけですね。

戸坂は戸坂でね、彼の論文を読むとほとんど引用がないですね、自分の言葉でマルクスの唯物論を咀嚼して書いていますね。さっきの知識人論でも戸坂からの影響は大きいですよ。僕の一番好きなのは戸坂の『イデオロギーの論理学』。あれはすごいと思いますね。それから、やっぱり丸山の著作はさすがに鋭いと思いますね。現実的なセンスと教養が一体になってますね。ただし、丸山はちょっと福澤にほれ込みすぎるところがあります。それが日本の近代に対する評価の曖昧さに繋がってると思います。日本の近代化の批判を天皇制と共産党を両極にして行う図式にも賛成できません。ただし、福沢批判については最近盛んになっていますが、一般に彼の断片偏句の批判ではなく、彼が何を意図したのかというレベルでやる必要があると思います。先ほどのアジアの盟主論は福沢から出てくるわけですから。

今までの理論的作業を自分なりにふりかえると、自分の経験した、市民主義・リベラル派とマルクス主義・革新派との理論的・政治的分裂に始まり、社会主義の崩壊が大きなインパクトになってますね。それにどのように対処するのかという模索が、次第に民主主義論・市民社会論・社会主義論に接近していったと思います。

ただ、僕のような市民社会論なんかの研究は、唯研内部としてはそんなに多くないでしょうね。僕らよりちょっと下の後藤さんとか中西さんとかはもっと現実的・具体的な問題、労働運動とか青年運動とかに取り組んできましたね、やっぱり 5～6 年違うと差異があるなあと思います。それから尾関周二さんや佐藤和夫さんなんかも自分の焦点をぐっと定めて、環境問題とか政治と知識人の問題とかに突っこんでやってるのは、やはり立派だと思いますね。それに、マルクス研究の渡辺憲正氏。その点で、彼らと編集委員の一人として、唯研会員の多くの人に執筆してもらった『哲学中辞典』を数年前に出版できたことはよかったと思っています。

ISSN 1883-0803